

# A c a n t h u s

第 3 3 号

平成 2 3 年 3 月 1 8 日

茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

← 全日制の同窓会入会式

去る 2 月 2 8 日、3 年生 3 2 7 名の同窓会入会式が行われました(定時制の入会式は 3 月 1 4 日、2 3 名が入会)。日頃同窓会とあまり関わり合いを意識していなかった皆さんにとっては、進修同窓会入会の意味合いをしっかりと捉えきれない部分があるかも知れません。そこで、今号では本校進修同窓会の「成り立ち」と、設立 2 5 周年(昭和 3 7 年)までの「同窓会の歩み」を紹介したいと思います。

## 明治の土中同窓会

旧本館の前庭に「沃野一望数百里」の校歌碑が建っている。これは昭和 3 7 年、進修同窓会結成二十五周年を記念して建設された『アカンサス』第 1 3 号(平成 2 1 年 6 月刊)とあるから、本校の同窓会が結成されたのは、昭和 1 2 年ということになる。どのような経緯で誕生したのか。この時点で開校してから四十年も経過している。それまで同窓会らしきものは無かったのか。早速本校の歴史を知る上で欠かせない校友誌『進修』を繰って見た。

「第一回卒業生で心栄誉と興望を荷ふの時に至れば僅か三十二名なりけり あはれこの同窓の人々は前世いかなる縁かありけん 朝な夕な共に築み共に悲しみ同じ師の君の恵に浴して同じ歴史を有さんとは 落下流水春行かんとなす友また散らんとす昨日の友相見る能はず昨日の恩師仰かんに處を異にすさばかりふかきえにしの吾人離別と共にかはるべきにあらず ここに旧来の友誼を維持し師弟の關係も親密にせんとて同窓会を組織しぬ 三月二十八日卒業式の終りし後この事を議し七月を期して第一回を開かんとし中山酒井両氏を幹事とせり『進修』第 4 号(明治 3 5 年 9 月刊)とあり、明治 3 5 年 7 月に第 1 回卒業生十六名が校長以下教員十五名の参加により、第一回同窓会が開かれている。六条からなる次のような規約も定めている。

第一条 本会は師弟の關係同窓の友誼を保つるを以て目的とす

第二条 本会は土浦中学校卒業生を以て會員とす

第三条 本会の事務を処理せしむる為め會員互選を以て幹事二名を置き任期を一ケ年とす

第四条 會員は動静を通知すべし

第五条 會員の移動は雑誌進修の紙上に於て報告すべし

第六条 本会は一月及び七月に開會す

附則 規約の条中変更を必要とするときは集會の時議定すべし

正に立派な同窓会が誕生したのであるが、会の成長発展は必ずしも順調では無かったようだ。

「業を卒へてから、各方面に活動している同窓の友誼が一月と七月とに、相会して、もとの儘の気兼ねなく知識交換情交を温めたい学校との關係も厚くしたいと組織せられたのが、この同窓会で、三十五年七月に第一回を開いたのを始めとして、三十六年に二度、三十七年に二度開いたのである。三十八年の一月は時恰も日露の戦役中で、會員中に召集せられたものも多く、滿韓の荒野に露堂の苦しみを嘗めて居るものも多いので、開いても多く集まる見込みがなかった。で幹事の相談で開かぬ事とした。『進修』第 7 号(明治 3 9 年 3 月刊)とあるように日露戦争で開けなかつた時もあったが何とか会は維持されていた。

「三十五年七月に第一回を開いてから丁度八回になる その間に著しい発達もせず また多くの巧果も収め得なかつた。これは會員が増して来て一面識もない人が多くなり又職員の方にも更迭があつて勢盛んといふ訳にゆかないのかも知れない、されどこの儘において盛大にならうか否衰微する計りである。組織が面白くないといふ者もありさうだから今度の第九回からは学校でやらう。多年ヤンチヤンをきめた旧校舍に集合するといふ事だけで大なる興味を与へるであらう。況や旧師旧友に会ふといふ事あるをやだ。また職員の方でも出席者が多くならう。師弟の關係及び意

思の疎通にもよからうといふので一月三日ときめた。『進修』第 1 0 号(明治 4 0 年 4 月刊)

明治 4 0 年 1 月には第九回同窓会が五十三名の教員・卒業生の参加により、学校を会場にして行われた。ここで、本文七条、細則六条・附則からなる同窓会規約が決議された。その主な内容は卒業生相互の親善協力と母校の発展を目的とするという抽象的なものであった。しかし、その翌年の明治 4 1 年 1 月の例会に出席した卒業生は二十九名、同年 7 月の例会は筑波山登山が計画されたが、参加者は十一名という有様、明治 4 3 年 1 月例会に至っては幹事会の集まりも悪く、開會されていない。後、元本校校長の山口勇吉氏(中 2 7 回)は「創立当初は卒業生数が毎年四、五十名ぐらゐであり、したがって同窓会の出席者も少なく、いつの間にか有名無実のものとなつてしまつたようである」『進修百年』平成 9 年 1 1 月刊)と述べているように、会は発展することなく、大正 2 年、遂に解散してしまつた。

## 東進会誕生

先の山口氏によれば、「幸いなことに、大正末期か昭和初期頃から(推定)在京土浦中学校同窓会が結成され、海軍主計中將・武井大助氏(中 3 回)を中心として毎年總會が開かれていた。昭和十年六月二十日には在京同窓会が銀座の鹿鳴館で開かれ、出席者五十数名で盛大であった。(中略)遙かに母校を偲んで懐旧談に花が咲き、和やかに盛大な会合であった」(『土浦中学校同窓会報第 2 号』昭和 1 1 年 1 月刊)と記している。

誠に奇妙なことだが、土浦中学校同窓会に先行する形で、その一支部的な東京の同窓会が独り歩きを始めていたのである。

## 暫定同窓会の結成

こうした在京同窓会の活発な動きに刺激されて、地元土浦にも漸く同窓会結成の機運が生じてきた。昭和9年4月、当 faced 三十三回以降の卒業生を以て組織するが、全卒業生による同窓会が結成された場合には、それに合流するという暫定的なものではあったが、土浦中学校同窓会が結成されたのである。

新たに定められた規約の第二条には「本会ハ会員ノ親睦ヲ図リ、母校ノ発展ニ資スルヲ以テ目的トス」とあり、その他の条文も殆ど明治期の同窓会とあまり変わっていないが、第十二条に「本会ハ毎年一回会報ヲ発行シ会員ニ頒ツ」という具体的な活動を規定している点は、何とか停滞的な親睦団体から脱却しようとする意欲が示されている。



第1回同窓会総会出席者一同  
(昭和9年8月5日)  
土浦中学校玄関前で



同窓会報1・2・3号

## 進修同窓会の誕生

昭和11年、竜ヶ崎中学より赴任してきた宗光太郎校長は同窓会に対する関心が深く、結成に向けて積極的に動いた。「土浦中学のような長い歴史と伝統のある学校に、全体同窓会のないのは可哀しいことだ。早急に結成の準備をするよう」と関係者を大いに督促した。

翌十二年の四月二十二日に、母校講堂で創立四十周年記念式典が挙行された。そしてこの記念すべき年に全体同窓会を結成しようという議題が、満場一致で可決された。

かくて同年十月二十四日、待望久しかった全体同窓会の発会式が来賓、卒業生多数参列のもとに母校講堂で盛大に挙行された。そして会名を《進修同窓会》とし、(中略)会規約は大體、暫定同窓会及則に準じ、年一回の総会を四月の第一日曜日に開催することが決定された。(中略)そして在京土浦中学校同窓会は、これを東京支部として進修同窓会に包含されるにいたった。《進修百年》平成9年11月刊)

こうした経緯で誕生した「進修同窓会」だが、この昭和12年は、盧溝橋事件を

きっかけに日中戦争が勃発した年である。翌13年には国家総動員法・国民徴用令が公布され、戦時体制強化が進められるといった情勢下で、同窓会活動も様々な制約を受けた。昭和16年には太平洋戦争に突入し、教育の場においても、皇国の道に則る全体主義的教育が強化されるようになった。

このような時勢の流れの中で、当時、大政翼賛会茨城支部の庶務部長であった菊田禎一郎氏(中7回)は宗光校長らに諮り、進修同窓会の事業として、幕末の勤皇思想家・佐久良東雄の歌碑建設を提案した。

東雄は真鍋村(現土浦市真鍋)善応寺の住職であったが、後に仏門を去り、倒幕運動に加わった。彼は和歌もよくし、「すめらぎに つかえまつれとわれをうみし わがたらちねぞ とうとかりける」という忠孝両道を詠んだ。太平洋戦争が日ごとに険しさを増す時局に、この歌は一億玉砕の戦意昂揚に果たす上で大いなる意義があるとして、同窓会は東雄の歌碑建設を決めた。

進修同窓会の募金を主とする建設資金により、昭和19年4月に歌碑は完成し、母校本館前に建立された。

この歌碑建設は、進修同窓会にとって、設立以来最初の事業というべきものであったが、皮肉にも建立後一年余で終戦となり、国家主義排除政策で、校庭地中に埋められてしまった。(注 昭和29年、歌碑は掘り出されて、東雄にゆかりの深い善応寺境内に再建された。《アカンサス》第24号参照)

また戦時中、校地に隣接する農地をなかば強制的に買収して、グライダー練習場としていたが、戦後その土地の返還要

求運動が起こった。これに対抗して練習場跡の校地を確保したいとする学校を応援して、同窓会はPTAと共に、強力な校地保全運動を展開し、母校愛に燃える多くの会員諸子が尽力して解決に導いた。昭和32年、同窓会員の旧ポット部仲間が中心となって、母校にポットを寄贈し、土浦一高にヨット部を誕生させ、その育成に努めた。このことを機に、同窓会は土浦一高の生徒会諸活動の支援にも積極的に乗り出した。

昭和37年、進修同窓会は結成二十五周年記念事業として、母校に校歌の碑建設を決め、翌38年10月、本館前庭で校歌碑除幕の式典が盛大に挙行されたのである。この後、同窓会は一貫して母校の教育活動の支援を続けてきており、同窓会予算の多くを、生徒の部活動補助などの生徒奨励費・生徒活動補助費に割いている。(同窓会予算の詳細については、毎年12月に発行される『進修同窓会会報』を参照されたい)

このように、本校の同窓会は単なる親睦団体ではない。常に母校に寄り添って土浦一高と共に輝かしい伝統を担い続けるある種の運命共同体ともいえよう。



平成22年度 定時制卒業式

於同窓会館(アリーナ) 3月14日

卒業式後、学習館で同窓会入会式が行われた